

LOVIN' HYOGO

地元を愛する人のための「地元を愛する」ストーリー

縁。生まれ育った場所との縁、ふ訪れた場所との縁。そこで出会った人との縁や、仕事での縁、人がつないでくれた縁。いろんな縁がありますが、縁ができることで、その人にとつての「地元」になり、「地元への愛」がより深まったりするのではないのでしょうか。実は兵庫には、そんな「縁」から広がった地元を愛するストーリーがたくさん。兵庫の各地で生まれている、さまざまな形の愛を、たっぷり紹介します。

CONTENTS ■すこいすと / 高校生チャレンジ留学 / TSUNAS / ひょうご農林水産ビジョン / ひょうごこころ女性活躍推進企業 / コノ・ホシ / ひょうごTECHイノベーションプロジェクト / ひょうごオープンファーム / 多文化共生社会検討実務者会議 / すこいすと / リメンバー117 / ひょうごビジョン2050 / 万ばくばく一勝手に楽しむひょうごフィールドバリエーション / ひょうごSDGsスクールアワード / 私にとつてのYELL / HYOGOミュージアム魅力発信プロジェクト / 兵庫県森林ボランティア団体連絡協議会 / ひょうご地域創生フェス「カケルDAY」

つなぐ人も、つながりたい人もにぎやかに集まった一日!

カケルDAY ひょうご地域創生フェス2025

2025年8月30日に「MITO」で開催され、会場は一般参加者を含めた1,000人以上にぎわいました。当日の会場の様子をレポートします!



ひょうご地域創生フェス「カケルDAY」とは
各地で地域活性化に取り組むプレイヤーが一堂に会し、交流・発表を通じた出会いと価値を生み出すことを目的とした「地域創生が体験できるフェス」。



出展者も参加者も、業種や分野を越えて、皆刺激的な交流を楽しんだ。



福祉活動のPRブースでは、思考力・体力を育む忍耐力体験が大人気!

炭×林業×地域活性化

神戸で炭火焼肉専門店を提供していますが、今後は「炭×林業」で地域貢献がしたい。今日は販売のかわらわら多くの人と交流し「人手が少なくてできる農業、アイデアをたくさんもらいました。異業種交流ができる機会は貴重ですね。」

農産物 代表 萩原 英治 さん

5分でできる避難訓練

僕も阪神・淡路大震災の被災者ですが、「防災」がまだに堅い言葉で怖いんです。「案」を入りに、気軽に避難訓練できる地域にしたいと活動中。今回、子どもたちが何回も楽しんでくれたので、これから防災意識を広めたいです。

株式会社マインズ 米澤 弘太 さん

2メートルを超える大工体験も、リスミカルな作業音が会場に響いた。

工作などの体験型アクティビティを楽しむ子どもたちの姿も▶

バタかぼ大作戦!

バタナッツかぼちゃを人気野菜にするためしました。「バタかぼ大作戦」は地域のコミュニティづくりが目的。子どもも親も一緒に計画性を学び、困ったときは大人に聞くことで問題解決力も育みます。バタかぼを起点に地域を盛り上げたいです!

いなかつ代表 池田 勇樹 さん

赤穂×ミナルツリズム

赤穂の地酒と蒸し牡蠣のペアリング体験を楽しんでもらう企画をしました。今回の(さ)の方と交流ができたが、とくに中国からの留学生が日本酒に興味を持ってくれて「ぜひ赤穂に行きたい」と言ってくれたのは嬉しかったですね。

あこう魅力発信基地

淡路島×建築×ウェルビーイング

最先端の技術で全部つくるのではなく、地方の個性を活かしたものがいいと思います。今回は淡路島を中心につながりが増えたらいい。島の地産にピンを立ててもらった企画でも「おひいちゃんの家」でOK! 最後にはいろんなピンが立ち、交流も生まれて楽しかったです。

建築家 森達 二さん

ステージイベントも大盛り上がり!

どのピンもアイデアと地元愛に満ちたものばかり。多くの聴衆から質問も飛び交った。

フェスに参加されたアクション委員会委員より一言

地域を元気にしようとする人たちの背中、学生たちの将来の選択を応援する力にもなるはず

根拠のつながりによって地域の活動はもっとななる。交流による情報発信は地域創生に必ず必要

地元育ちの学生も巻き込んでプレイヤーの活動をもっと盛り上げたい!

アクション委員会って?

地域創生のプロジェクトをさらにパワーアップさせるため、現場の最前線で活動するメンバーが集結。「兵庫県地域創生アクション委員会」では、兵庫に変化を起こすべく、どうすればもっと地域が良くなるか、思いが伝わるかについて、特にとらわれのない自由なアイデアをぶつけていきます。

「誰かのために」が原動力! 活動が楽しくなると、これこそ「ひょうごらしさ」ではないかと感じています。

誰もが心地よく集まれる“場”で、出会いを生み出す

「すこいすと」のひとり、清水健矢さん。24歳のとき生活の利便性が高山に囲まれた田舎に住みたいと丹波移住を決めました。空き屋になっていた「水分水茶屋」を交流を生み出すコーヒースタンドとして復活させ、さらに自然豊かな青垣地区にはコワーキングスペースもオープンするなど自ら楽しみながら地域おこしを行っています。「ダーツやバーベキューができる秘密基地みたいな空間も作って、メインスペースでイベントを開催するようにして、地域で働く人たちがゆるく集められたら。今は起業セミナーや大学教授を招いてのワークショップ、アパレルのポップアップショップなど活用する幅が広がって地域外との交流も生まれてきたので、この流れが広がってくれたらと思います」

清水さんのインタビューはこちらでも読めます!

すこいすと

「自分×仲間×地域」の熱量を伝える「ひと」。すこいすとを紹介するウェブメディア。すこいすとたちの活動を通して、地域の活力となる「夢」と「協働」のヒントを発信している。



まわりの人々には幸せでいてほしい。そのほうが僕も楽しんでいけるから



ラグビーの「楽しみ方」をニュージーランドで体感、日本で発信!

高校で先輩に誘われて、「たまに始めたラグビーにハマってしまったという石井さん。体のぶつかり合い面白くて、人生をかけてやりたいてい今ラグビーが大好き。でも日本ではまだ競技人口も多くなく、面白さが世間に伝わっていないのがもったいない。そこで「高校生チャレンジ留学」を活用してラグビーの本場・ニュージーランドに留学し、強豪校の練習に約4週間参加することに! 「現地では公園の芝生にラグビーのボールが立っていたり、学校でも昼休みに皆でラグビーをしたりラグビーが暮らしの一部になっていました。印象的だったのは、日本だと「部活」や「プロ」として厳しい練習を重ねて……というイメージですが、現地ではとにかく「楽しむ」ことが大切にされていること。チームプレイでも、ミスしたら「何やってんねん!」しゅなくて「ドンマ!」気にすんな。」という感じで、皆で気分を上げながらプレイする姿勢にグッときました。帰国後は現地で学んだ「楽しみ方」を自らのプレイに生きてチームメンバーと共有。真剣に、そして楽しく、高校生の挑戦から、新たなスポーツへの取り組みが兵庫に広がっていきます。

留学した学生たちのインタビュー動画を公開中!

高校生チャレンジ留学
HYOGO 高校生 海外武者修行 応援プロジェクト

兵庫で学び、グローバルな視点・能力を持つ若者を育成するため、留学先で働くの学びを深めたいとチャレンジする高校生を官民協働で支援している取組。

担当課のこんな思い

若い段階から世界を肌で感じること、国際的な視野の中で自分の目標や地域の魅力を再認識することにつながり、何ものにも代えがたい財産となるはずです。留学に挑戦する若者が増えていくことを期待しています。

つなぐ。かんじる。こころみる。

子ども、若者も、高齢者も、外国人も。地元への愛が結ぶ、人と人の絆。



居場所・役割 寛容性

一方通行な支援ではなく
歩み寄りで「ここが居場所」と
思える社会に

国籍に関わらず、ひょうごに暮らす一人ひとりが自分らしく生きられる社会を創出するために、必要なことは？県内で外国人への教育支援に注力し、多文化共生分野の実務者会議で座長を務める乾 美紀教授にお話を伺いました。

外国人の子どもたちと
関わりて自分がグローバルに
成長してるなあって感じます



乾 美紀さん（兵庫県立大学 国際人間学研究所）
ラオスからのモン難民との出会いを機に、現地で調査を重ね修士号を取得。専門は多文化共生教育・国際教育協力。

外国人への教育支援に興味を持ったきっかけは、アメリカでの「モン難民」との出会い、日本語教師として働いていた学校に、ラオスからやってきたのがきっかけ。言葉が通じなくても、同じアジア人同士、現地の子が敬慕する日本食も喜んで食べてくれたり、懐いてくれる子どもたちがとにかく可愛くて、アメリカ人に日本語を教えるより、モンの子どもにも英語を教えるのが楽しくなっていました。同時に、ラオスを追われることになった歴史的背景や現地の教育環境を探るようになって、今も研究を続けています。

帰国後、兵庫にもラオスの難民がいるのかな？と調べて会いに行くと、アメリカとの支援の格差にショックを受けました。特に教育面で、高校進学がままならない状況に苦しんでいる若者が多かったんです。同じ世代でも、アメリカと日本、どちらに生まれるかでこんなに違うのかと、一見、この国の人がかかるとか、自助組織がなかったり、そんな「自立しないマイノリティ」を助けたいという気持ちが強くなりました。人生に多様な選択肢を持つために、高校を卒業することが必要だと感じてます。

もうひとつ、子どもたちに勉強を教えるボランティアに参加して感じるのは、居場所の大切さ。母語で話せる、自国のことを自由に話せる場があることが嬉しいみたいで、勉強道具を持たずに、お喋りに来る子もいるくらい。「先生、ネパール語喋れへんの？」「ごめんねーわからへんねー」って言いながら教わったり、気づいたらネパールカレーに詳しくなっていたり。私も視野が広がって、自分が「グローバル化」している実感があります。二方向的な支援というより、お互いが歩み寄りって同じ目標を立てて理解を深め合う。これからの多文化共生に必要な不可欠なことだと思います。まずはイベントを覗くだけでも、本場のフードや文化に触れながら、地域の外国人と交流するのも楽しいですよ。

多文化共生社会検討実務者会議

外国人児童の増加に伴い、日本語教育をはじめとする多様な課題への対応が必要であることから、実務者会議に兵庫県と市町が協議し、今後の取組を検討。

加古川市 居場所・役割

「楽しい」を軸に
集う、考える、活動する。
まちが動く力になる。



もっと大事なことは
心のモヤモヤは
もっと大事にしたほうがいい

「これからの社会には、モヤモヤをちゃんと出す場が必要。——そう話すのは、加古川市でNPO法人シムズシーズの代表を務めるすこすのひとり、柏木登起さん。大学卒業後、「社会全体を知るにはまず企業で」と考え、企業の営業職に。その後、人手が足りないから手伝ってほしいと言われたのをきっかけにNPO法人の職員になり、障がい者の就労支援事業所や他のNPO法人の立ち上げ支援などに関わったそう。その一方で、社会的な役割に意義を感じつつも、さまざまな社会課題に対して「組織への支援だけでいいのか」と疑問に感じられたそう。その想いは「市民」の言葉が入ったNPO法人シムズシーズの名称に現れています。

「誰もが市民という役割を担う社会へ」——柏木さんたちは法人の「らしさ」や価値をあらためて話し合い、これからの社会を見据えて、自分らしく生きるための環境を自分でつくっていくという「市民の自律と自立」に支援の焦点を当てています。「心のモヤモヤをもっと大事にしたほうがいい」と思っていて、地域だけでなく、組織でもそう。おせっかいかもしれないけど、みんながモヤモヤしていることを話せて、自分のやりたいたいことを実現できる場があふれたいですよね。



柏木さんのインタビューはこちらでも読めます

すこす

「自分×仲間×地域、熱量を伝える」ひと、「すこす」を紹介するウェブサイト。すこすというまちの活動を通して、地域の活力となる「参画と協働」のヒントを発信している。



周囲とのつながりが
前向きにさせてくれたのかも

次代につなぐ 安心した暮らし

自分たちの言葉で
「あの日」を考える。
「これから」を考える。

阪神・淡路大震災から30年。当時はまだ生まれていなかった若い世代が、自分たちで考え、取材をし、自分の言葉で綴る「リメンバー117」プロジェクト。ある人は避難所の炊き出しについて、ある人は東日本大震災で神戸に避難してきたクラスメイトについて記事を書きました。その中の一人である山崎天智さんは就職活動中、大学4年生で震災を体験した木南さんに話を聞くことに。「木南さんは被災直後の3月に留年が決まって大学院進学を断念し、急遽、就職活動をするようになったそうです。被災、留年、就職。そんな中、ボランティアとして被災者支援にも積極的に動かれました。私が同じ立場なら込んで立ち直れないと思うのですが、なぜ落ち込まずにいられるのですかと聞くと「どうせ生きてんやったら、楽しく生きて方がいい」と話されたんです。取材を通して自身の就活の不安やその原因などに気づき、前向きにいられるヒントを見つけたそう。

また、グラブリングのある出来事を題材にした松林善寿さんの記事では、真冬のグラブリングでエアコン故障、1人あたり6〜7分しか使えないシャワーなどから、「当たり前」が「当たり前」であるのは、じつはすべてにおいて「不自由なく、恩恵を受け続けているからだと話されていました。1995年11月17日を経験した人だけではない、それぞれの世代や立場で考える「あの日」、兵庫の未来を拓く大きな力になるはずですよ。



こんな記事も、あんな記事も。

母と祖母のつづいたご飯が大好き。避難所の炊き出しをしていただけなのに、初めはなかなか慣れず、泣きながら食べた。——朝原 令

被災者支援の祖父と祖母。もし、地震があったら、何を食べて寝るかな。——楠木 明日香

共に歌うだけじゃなくて、歌を通して絆を結ぶ。——金原 美雪



他にもたくさんの記事を読めます

リメンバー117

公募で集まった18歳から25歳までの14人が、阪神・淡路大震災や防災についての記事を作成し、震災30年事業の締めくくりとして同事業の特設サイトで発信する県のプロジェクト。



淡路市 居場所・役割 安心した暮らし

地域に支えられて。
子育ての拠り所にもなる助産院

出産を機に神戸からふるさとの淡路島にUターンした助産師の藤岡勢子さん。住み始めてから気づいたのは「今の淡路島には移住者が多い。こと、しかし移住者は、両親が近くにいないだけでなく、友達づりが難しいこともあり、とくに出産・育児で孤立する人もいるのではないかと考えたそう。そこでどんな人でも助けを求められる、相談できる場を立ち上げよう、思い切って助産院を開業しました。

とはいえ自身も子育てで真っ只中、24時間365日助産院にかりながら、小学1年生の娘さんの話し相手にならなければならないという状況で、知らないおばあちゃん「ちょっとお菓子食べていき、声をかけてくれたり、「この地域では、今もまわりの人が一緒に子育てしてくれているんだって、身にしてみてもいいよ」と自身の小さい頃と重ね合わせる藤岡さん。

実際に頼るところがなく夜中に「助けほしい」と電話がかかってきたこともあるそう。「2、3時間お子様を預かってゆくり寝てもらった。そうしたらお母さんも笑顔になりました。その経験から、最近は一時期預かりも始まりました。誰かを頼って子育てするって悪いことじゃない。私はみんなにそう言っているんです。うちの子も私が預かることで、たくさんの人に育ててもらって、めっちゃ可愛らしいなって思っていますから」。藤岡さんが目指すのは、出産だけでなく子育てで困った時にも帰ってこられる場であり続けること。誰もが安心して子育てできる社会を実現するための大きな一歩がスタートしています。

藤岡さんの動画も観られます

ひょうごビジョン2050

人口減少、少子高齢化、グローバル化、技術革新、気候変動など、社会が直面する大きな変化に対応し「兵庫らしい未来」を創造するための指針。ウェブサイトで、実現にむけてすべき未来の実現に向けて新しい生き方・働き方を考え行動を始めるためのヒントを紹介。



もっと誰かを頼って
子育てしたい方がいい！



